

「不」の字音について ——中国・日本・朝鮮字音——

辻 星 児

1. は じ め に

日本漢字音と朝鮮漢字音を比べると、明白な「音韻対応」が見られる。

例)(1)

| 日 朝 | 日 朝 | 日 朝 | 日 朝 | 日 朝 |
|-------------|----------------|--------------|--------------|----------------|
| 我 ga : 'a | 五 go : 'o | 疑 gi : 'ui | 愚 gu : 'u | … ⇒ g- : '(ゼロ) |
| 煙 en : 'yən | 肩 ken : kyən | 面 men : myən | 血 ket : hyer | … ⇒ -e- : -yə- |
| 割 kat : har | 列 ret : (r)yər | 失 sit : sir | 卒 sot : cor | … ⇒ -t : -r[l] |

言うまでもなく、これは、両漢字音が、中古音を中心とした中国字音を借用した結果である。中古音の枠組みに照らして、対応がずれる場合も、借用の時期、方音などを考慮することによって、「対応」の説明がつくものも多い。しかし、散発的には、次のように全く「対応」しない例も見られる⁽²⁾（現在の通用字音において）。

例)

| | | | |
|------------------|---------------|---------------|--------------|
| (イ) 洗 sen : syəi | 告 koku : ko | 副 fuku : pu | 惹 jaku : 'ya |
| (ロ) 沸 fut : pi | 輸 yu : su | 粘 nen : cəm | 欧 ou : ku |
| (ハ) 圧 at : 'ap | 冊 sat : c'aik | 丑 tiu : c'yuk | 泣 kifu : 'up |

(イ)は、もともと中国字音に二音あったもの(両読字)で、日本と朝鮮とで、互いに異なった音を一般化させたために生じた不对応である。(ロ)は、一方が、類推読み(声符による類推)をしているために、対応しない例である。たとえば「沸」の場合、中国字音の反映形(reflex)は「ヒ」のはずであるが、声符「弗」に引かれたため、「フツ」となった⁽³⁾。他方、朝鮮字音 pi は、中国字音を正しく反映している。同じく「輸」も日本字音が類推読みである。これに対し、「粘」「欧」は朝鮮字音が類推読みの例である。なお、日本・朝鮮とも、類推読みをする例もある(「撫」 bu (日): mu (朝) 中国字音の反映形は fu: pu のはずである(滂[敷]母))。(イ)は、それぞれの言語内において、何らかの原因で、新しい字音が獲得されたもので、中古音からみれば、「圧」「冊」は日本字音が新しい字音を、「丑」「泣」は朝鮮字音が新しい字音を獲得したため、それぞれ中古音に対応していない例である。

漢字音の研究において、日朝の字音体系や中古音の反映を考究することは、最も基本的な課題であるが、ここに示したような「対応」から外れた字音の問題を考えることも重要な課題であろう。とくに(ロイ)のごとき「慣用音」「今音(俗音)」と称される字音を考察し、対照することも興味ある問題である⁽⁴⁾。

辞典に記された字音には、ときに韻書から機械的に割り出されたものがあり、実際に使われたものとは限らない。この点で、慣用音・俗音は、韻書の体系からは外れるものの、実際に用いられた(用いている)字音を反映しているものである。

「対応」から外れた字音の成立を考察するにあつては、個々の字ごとに、その特殊性を見ていかねばならない。ここでは、そのひとつの例として「不」の字音を考えてみる。

2. 中国字音史における「不」

「不」は、一般に、日本字音がフ(fu)という舒声すなわち非入声音であるのに対し、朝鮮字音は‘불 pur’という入声音であり、

互いに「対応」していない。「不」は、漢字のなかでも最も基本的で、頻度も非常に高い字であるが、その字音が両言語で異なっているのは、興味ある問題である。まず、これを中国語の側から見ていく。

「不」の字音は、『広韻』によれば、次の3(4)音がある。

平(尤):「弗也、又姓……」 甫鳩切(不)⁽⁵⁾ pǐəu¹

上(有):「弗也、説文作丕 鳥飛上翔不下來也……」

方久切(缶) pǐəu²

[去(宥)(平上で去声の又音を記載するも去声に見]

(甫救切) (pǐəu³)

入(物):「與弗同…」

分勿切(弗) pǐ(w)ət

すなわち、「不」は3(4)音をもつ多読字であるが、このうち日本字音は、非入声音を採用しており、朝鮮字音は入声音を採用している。つまり、この字音の不一致は、上述の(イ)の事例であることが分かる。「不」の字音として入声音を採用しているのは、朝鮮字音だけではない、ベトナム漢字音でも「不」は bat で入声音である。そして、中国の方言音でも、入声をもつ方言では、入声音の「不」が一般的である(太原 pəʔ、揚州 pəʔ、南昌 pət、梅県 put、広州 pat、アモイ put など)⁽⁶⁾。そして、北京音 pu⁴(ピンイン bù)も、実は入声に由来する音とみられる(後述)。このように見てくると、日本字音の非入声音「フ」がむしろ特異であることが分かる。

上記『広韻』の3(4)音は、全て否定(「弗」)の意を表しているが、このうちで当時の常用音はいずれであろうか。あるいは、何らかの使い分けがあったのであろうか。隋唐代の字音の実態を知るには、韻書の他、音義類などの字音注が用いられるが、「不」はあまりにありふれた字であるためか、音義類の反切や同音字注としてはほとんど出てこない。たとえば、膨大な『一切経音義』にも「不」の音注はない(神尾編(1976))。ただし『史記正義』『晋書音義』『敦煌出土礼記音残卷』には1例ずつ音注が見られ、すべて平声音

の反切が見られる（大島(1981)）。すなわち、『史記正義』は『集解』の「服不氏」（官名、巻1）に対する音注（福尤反）、『晋書音義』は「不準」（姓、巻51）に対する音注（甫鳩反）、「敦煌出土礼記音残卷」は「内亂不與焉」（雜記下）に対する音注（方乎反）である⁽⁷⁾。このうち、前二者は固有名に対する伝承音であろう。最後の例については後述する。

いっぽう、切韻の edition を見ていくと、「不」の平上去入声の音のうち、平上去声音は初期の edition から見られる。これに対し、入声音は、切韻の最終的な増補本である『広韻』（1008年）には出てくるものの、それ以前の残巻には出てこない。すなわち、当該箇所を有する唐代の切韻残巻、「切三（S2071）」、「P3694」、「王一（P2011）」、「王二」、「P3693」、『王三』、「蔣本唐韻」を調べると、欠佚する「P3693」、「蔣本唐韻」を除き、すべて小韻代表字として、平声音の「不」が掲出され、また上声と去声の又音を併載する。上声音では、「切三」、「王二」⁽⁸⁾は「不」を掲出せず、『王三』のみ掲出する（代表字は「缶」で「不」は小韻末字。他の残巻は欠佚）。そして去声と入声はすべての edition で掲出していない（ただし「王二」の入声部分は欠佚）。なお、『（天治本）新撰字鏡』には、切韻引用部分（貞苒（1961））として「不 平弗也無也否也」（巻12）とある。また、原本系『玉篇』の抄出とされる『篆隸萬象名義』には、「甫負反 否也弗也」（6帖112ウ）とあり、上声音のみを挙げるが、宋本『玉篇』は「甫負、府牛二切」とあり、上声と平声を挙げる。

このほか梁代の梵漢対音資料でも「不」は非入声音（pu）として転写されている⁽⁹⁾。さらに9・10世紀の蔵漢対音資料（河西方言）でも、「不」の転写は非入声音で示されている（例：「不可思議 pu kha si 'gi」（『金剛經』）；高田（1988））。

以上のように、韻書などによる限り、唐代では、「不」は平上去の音が用いられ、入声音は出てこないことが分かる。

さらに、唐代の字音を調べるには、音注のほかに押韻が重要な資料となる。この点から「不」の問題を見てみる。「不」には、動詞などの前に置かれて一般的な否定を表わす否定辞の用法と、文末に

用いられて疑問を示す助詞的な用法があるが、前者の用法は「不」が句末に来ないため押韻とは無関係である。しかし、後者の用法（例えば「汝意憶儂不」：李白「秋浦歌」）は「不」が句末に来るため声調が分かる。このような用法の「不」が唐詩に用いられた例は少ないが、管見に入った9例を調べると全て平声（尤・侯韻）である⁽¹⁰⁾。なお、六朝の詩においても、句末で疑問を表わす「不」が平声で押韻された例（陶潜「遊斜川」「酬劉柴桑」など）があり、唐代と同様の声調であることを示している。

いっぽう、唐詩のうち近体詩は、平仄がはっきりしている。そこで、平仄が明確な律句において、いわゆる「二四不同」「二六対」の位置にある「不」を調べることによって一般的な否定辞の「不」も、平か仄かが判明する。この点から律句を調べた結果では、「不」は、全て仄声である。（たとえば「江畔逢君醉不迷」（王昌齡「別李浦之京」）の句において「畔」は、仄声（去）なので「不」も仄声のはずである）。上述のように、唐代の韻書では「不」の入声音は掲出されていないので、この仄声は、少なくとも入声ではありえない。

このように、「不」の非入声3音のうち、平声は句末助詞として、上あるいは去声は否定辞として用いられていたことが分かる。このうち去声音は『広韻』でも又音として以外は掲出されていないところを見ると、特殊な音と見られる（いわゆる「変調」か）。なお上記「敦煌出土礼記音残卷」で否定辞の「不」に平声の音が記されていることを挙げたが、これは、当時の一般的な否定辞の声調（上声）に対する、特殊な伝承声調を示すためのものと推測される。

「不」の字音で、入声音が本来の音でないことは、上古音の研究からもいえる。『詩経』には「不」の押韻例はないが、「不」を諧声符にもつ字（「罌」縛謀切 平、「否」方久切 符鄙切 上、「朮」縛謀切 平、「丕」敷悲切 平、など）の字音は非入声音である。そして、「不」は上古音の之部（-iʷəŋ）に属するものとされる（董同龢（1944））。また、いわゆる二合音である「聿 吳謂之不律」（『説文』；『爾雅』）の例も、「不」が非入声であった傍証となるかもしれない（ただし、これを bl̥wet などと解釈すればのことだが）。さらに、東晋時代の反切資料には、

非入声の字と見られる字の反切表記で「不」を反切下字に用いた例がある（牟「無不反」：坂井（1975）資料編85頁等）。

「不」は、以上のように、唐代までは非入声音が一般的な字音であったが、10世紀以後、入声音の反切表記が現れてくる。上記の『広韻』（「分勿切」）以前の入声表記の反切としては、『新集藏經音義隨函錄』（940年序）の反切（「不言反 上 ‘夫勿反’ 無也」 卷20）⁽¹¹⁾ が挙げられ、また『龍龕手鑑（鏡）』（10世紀末）には、「不」に「分勿」の反切（卷4，1ウ）が見られる。さらに、ブラフミー文字による転写資料（10世紀？）でも「不」は入声音として現われている（「不’hviri’」⁽¹²⁾）。

『広韻』以後の韻書では、『集韻』（11世紀）にも登場する（「無也分物切」平上去声音も掲出）。また等韻図にあっても、宋代の『切韻指掌圖』には「不」が平声とともに入声音の欄（一等幫母）に現われる（没韻）。（ちなみに『韻鏡』には、入声に「不」はなく、一八転（没韻）一等の幫母の欄は空欄である。）このほか、「不」の入声音は、『集韻』以後の韻書その他で一般的に現れてくる（『増修互註礼部韻略』『古今韻会举要』『中原音韻』『洪武正韻』『韻略易通』など）。そして、現在の北京音 pu⁴は、この入声音から来ているとされる（王力（1958）第2章）。

なお、中国漢字音の歴史では、「不」は軽唇音化（p>f）する環境にある。確かに、中古音で上声の「不」と同音の「否」は現在の北京音で fou³（上声）となっているが、「不」は fou³をもたない。また平声の「不」も fou¹（陰平）となるはずだが、そのような字音は存在しない。いっぽう、入声音も軽唇音化し、fu²（陽平）となるはずであった。実際、『広韻』で「不」と同音である「弗」「𪔐」「𪔐」などは全て fu²である。しかし、「不」だけは例外的に軽唇音化していない形が伝わり、現在の北京音で pu⁴（去声・陽平）となっている。「不」は極度に使用頻度が高いため、軽唇音化していない、より古い形を語音（口頭音）として伝承したのであろう⁽¹³⁾。

以上のように「不」の字音は、唐代までは、一般的に非入声音が用いられていたが、それ以後、入声音が一般化していった。「不」

の入声音は、文献的には、10世紀以降に現われるが、語音としては、唐代から用いられていたと見るべきであろう。そして、このような入声音の発生は、「弗」の字音を奪ったために生じたものと思われる。上古中国語では、「不」と「弗」とは、異なった否定機能を果たしていたと見られるが⁽¹⁴⁾、のち両者の機能的区別がなくなるとともに、「弗」という字が次第に用いられなくなった。これと同時に「不」は「弗」の音を取り込んだと思われる（『広韻』には、「弗」は「不」と同じ小韻に入っている）⁽¹⁵⁾。

このような経緯によって、「不」は、本来の平上（去）声以外に、入声を持つに至ったと思われる。そして唐代には、否定辭の字音としては、おもに上（去）声が用いられ、語音として（あるいは非伝統音として）は、入声音が用いられていたと推定される。

3. 「不」の日本字音

次に、「不」の日本字音として、圧倒的に用いられている非入声音「フ」を考える。「フ」の字音（表記）は、万葉仮名（たとえば「安不知」（アフチ、棟）『万葉集』3913）以来、平安時代以降の呉音資料である『法華經音（九条家本）』『法華經釈文』『類聚名義抄』（禾音）、『世尊寺本字鏡』、種々の法華經音義類などに広く例証される。これらの資料に現れる「フ」は、呉音形とされる。すなわち「不」は尤（有、宥）韻に属するが、この韻の呉音形は -u であり、「フ」は規則どおりの反映形である（同韻唇音字の「浮」「缶」「負」「婦」「阜」など参照）。この形は、原音 pġəu の単母音化形であり、呉音の中でも古い層に属する字音とされる⁽¹⁶⁾。

呉音資料における「不フ」の声点は去声・上声が振られている（『類聚名義抄』『法華經音訓』『法華經音義』類など）（小倉（1995））。したがって、この「不」は、中国原音で平声音の可能性が大きい（呉音の上去は中古音で平に対応することが多い）。ただし、呉音の声調に問題が多いことは、よく指摘されているところであり、輕輕に原音との関係を云々することはできない。

ところで、呉音資料には、実は入声音の伝承もまれに見られる。

『恵信僧都義読』（鎌倉時代）には「方越反ホツ」（『法華経』『功德多不』）の注がある⁽¹⁷⁾。また、保延本（1136年）『法華経単字』には「方弗反」（「不退転」；諸音義類は非入声）が見られる（沼本（1982）195頁）。入声音（物韻）が呉音形で -ot となるのは、「不」と同じ物韻に属する字音に共通の形である（「払」ホツ、「物」モツ等）。また「フツ」の音も見られる（『明鏡集』（鎌倉時代；沼本（1982））が、これは漢音形と見られる。これら呉音資料における入声音が、古来からの伝承音か、新しい音の混入か分からないが、おそらく後者であろう。

いっぽう漢音では、尤（有、宥）韻の反映形は、-iu であるので、「不」も「ヒウ」となるはずであるが、呉音形と同じく「フ」となる。（たとえば長承本『蒙求』、『胎蔵界自行次第天永点』、『仁治本古文孝経』など；沼本（1982）850頁以下、同（1995））。漢音では、「不」に限らず、唇音下では、-iu という形は現われない。これは、満田（1964）以来、軽唇音化と関連させられている。

なお、漢音「不」の声点は上声である（長承本『蒙求』、高山寺蔵『史記』「治不チフ：不に上声点」）。これは中古音の否定辞の声調（上述）と合致している。入声音は、「フツ」であろうが、上記以外、見られないようである。

以上、「不」の日本字音は、入声音が、ごくまれに混入しているにせよ、呉音、漢音ともいづれも、圧倒的に非入声音「フ」を採用している。これは、唐代以前および唐代において、非入声音が一般的、標準的であったことを反映していると思われる。

さらに、漢音後の中国の字音を反映することもあるとされる、いわゆる「新漢音」には、「不」を入声で読んでいるものもある（たとえば「不得（フツク）」；漢音声明「戒品」；頼（1951））。「新漢音」が唐末北方音の系統を引くとすれば、ここでの入声音の出現は、中国音の状況と軌を一にするものである。

なお、中世室町期頃から「無」の字音との混淆により、「不」には、「ブ」という「慣用音」が発生し、その後確立する（「不作法」「不用心」「不調法」など）。これについては、高松（1982b）に詳しいので省略する。

4. 「不」の朝鮮漢字音

最後に、「不」の朝鮮漢字音について考えてみる。「不」の現代語の字音は、불 pur であるが、中期語(15,16世紀)では불 pur である(『六祖法宝壇經諺解』(1-42等)、『大学諺解』、『中庸諺解』(ともに校正序本)、『千字文』(光州,石峰)、『新增類合』など。声点(傍点)は省略。以下同じ)⁽¹⁸⁾。現代語音で불 pur と変化したのは、言うまでもなく、唇音下で区別されていたㅍ u とㅍ u が、いわゆる「円唇化」によって、17~18世紀にㅍ u>ㅍ u となった結果である。この불 pur (불 pur) という形は中古音の t 入声音に対応する入声音(物韻)である。このように朝鮮字音が、入声音を一般化させていることは、唐末以降にこの字音を借用したか、あるいは、それ以前(唐代)に非標準音としての入声音を採用したか、ということになるが、おそらく後者であろう。なぜなら、一般に開口ㅍ乙の介母をもつ -je を朝鮮字音においてㅍ -u で反映させる(「不」は開口扱い)のは唐代慧林音と一致するからである⁽¹⁹⁾。すなわち、「不」불 pur は、開口韻である、「斤」근 kun (欣韻)「隱」은'un (隱韻)などと同じ反映形である。この場合、「不」の属する唇音字(文韻所屬)のうち、平上去は例外的に合口-ㅍ -un (例えば「分」분 pun)となるが、入声はㅍ -ur (「不」불 pur、「払」불 pur、「物」물 mur 等)となる⁽²⁰⁾。

ところで、朝鮮字音において、「不」には、早 pu という現代音もある。一見すると、この早 pu は、中古音における非入声音の反映形であるとも見られる。しかし、よく知られているように、この早 pu は、その出現が非常に限られている。すなわち、「不」の次にくる字の頭子音がㅍ t- とㅍ c- の時だけ早 pu が出てくるのである。したがって、次の頭子音がㅍ t、ㅍ c 以外の方は、「不可 불가 pur-ka」「不滿 불만 pur-man」「不死 불사 pur-sa」「不通 불통 pur-t'ong」「不測 불측 pur-c'uk」のように、불 pur となるが、次の頭子音がㅍ t、ㅍ c の時は、「不当 부당 pu-tong」や「不足 부족 pu-cok」のように早 pu となる。すなわち불 pur と

早 pu は相補分布をなしている⁽²¹⁾。

このような量 pur と早 pu の自動的交替は、漢字音の中では「不」だけの現象で、すでに16世紀の文献に見られる。たとえば、『翻訳朴通事』の「不足 브족 pu-cyok」(上12オ、20ウ、63ウ)、『小学諺解』の「不正 브정 pu-cyæŋ」(5-17ウ)などがそれである。つまり、16世紀には、このような一見、非入声の字音は早 pu ではなく、旦 puw で出てくるのである(声点は去声)。ここで、もし朝鮮音が中古音の非入声音を借用したなら、尤(有宥)韻であるため当然、中期語でも早 pu で現われるはずある。そのように考えれば、この旦 puw の音は、朝鮮語において入声音量 pur のㄹ r がㄷ t、ㅅ c の前で落ちた形と言わざるをえない(しかも旦 puw という漢字音は中期語に存在しない)。

では、なぜ「不」にだけこのようなㄹ r の脱落が起こったのであろうか。この理由としては、中期語では、語中におけるㄹ r とㄷ t/ㅅ c との連続が制限されていたことが挙げられる。すなわち、中期語において、形態素内部で-ㄹㄷ- -rt-、-ㄹㅅ- -rc-といった音連続は原則として見られない。また-ㄹ r で終わる用言語幹にㄷ -t- やㅅ -c- その他が続くと末音の-ㄹ r が落ちる変化があること(r 語幹の自動的交替。例: 니디 아니키시니 niti 'anihesini (不起)<닐 nir)『釈譜詳節』13-33b)、さらに複合語でも、前部形態素の末音-ㄹ r が、後部形態素の頭音ㄷ t、ㅅ c に接したとき、脱落することがある。例えば、벼돌 pyetər (星月)<별 pyər +돌 tər (『月印釈譜』8-7ウ)、시우대 si'utai (絃管)<시울 si'ur +대 tai (『釈譜詳節』13-9オ)、므조미 mɯcəmi (泳)<물 mɯr +조미 cəmi (『訓蒙字會(叡山本)』中1ウ)、므저울 mɯcə'ur (準)<물 mɯr +저울 cə'ur (『新增類合』上28ウ)などがそれである⁽²²⁾。したがって、「不」という極めて文法的、接辞的要素が、ㄷ t/ㅅ c- で始まる形態素に接した時、このような音韻規則によって末音のㄹ r が脱落することになったと考えられる。ㄹ r を末音にもつ「不」以外の漢字は、「不」ほど接辞的ではなく、実質的意味を持っているので、複合した場合もㄹ r は脱落せず、次のㄷ t/

ス t/c が濃音化するのであろう。北京語でも、「不」は後続する語の声調に応じて声調の異形態（変調）を持つことはよく知られている。

以上を総合して考えると、「不」の朝鮮字音は唐代の入声音を借用し、一般化させたとみられる。

5. ま と め

本稿では、「不」の日本字音と朝鮮字音の相違について、中国字音史を中心に考察した。まず中国における「不」の字音の変遷を辿ることによって、中国における「不」の字音が、唐代を境に、非入声音から入声音へ交替していったことが明らかとなった。すなわち、「不」は上古音から唐代中古音まで、非入声音が用いられてきたが、「弗」の字音を奪うことによって入声音を獲得したと考えられる。そして、その入声音は、10世紀以降、文献に現れはじめ、急速に広まった結果、字音として定着した。現在の諸方音に見られる「不」の音は、多くこの入声音に由来している。「不」の日本字音（非入声音「フ」）と朝鮮字音（入声音 ‘불 pur<불 pwr’）との相違は、このような中国字音の変遷に即応して借用されたものである。すなわち、一般に、日本の呉音は唐代以前の字音を、漢音は唐代の標準音を借用したものであるが、この点から「不」における非入声音も、中国の伝統的、標準的な字音を借用したものといえる⁽²³⁾。唐代には、すでに入声音も存在していたことが推定されるが、漢音はそれを借用しなかった。これは、当時入声音が非伝統的な語音であったからであろう。これに対し、朝鮮字音は、日本漢音と同じく唐代音を借用したが、漢音と異なり入声音を採用した。これは唐代（以降）、入声音が語音として用いられはじめ、勢力を伸ばしつつあったことによるものと思われる。

このように、両言語における「不」の字音の相違は、中国原音における、非入声音から入声音への変化を反映したものであるが、最後に、この相違を生み出した背景について触れてみたい。まず、日本では、奈良時代、いわゆる漢音を将来したのは、おもに留学僧で

あったが、彼らの学んだ字音は、当代の標準音であった。しかし、遣唐使廃止以後、新しい中国音に接することが殆どなかったため、字音の定着と普及には、唐代の切韻系韻書や『玉篇』などが重要な役割を果たした。これらのことを考えれば、日本において「不」の字音が非入声音として定着したことも首肯できよう。いっぽう、朝鮮にあっては、中国との関係は、地理的、文化的に日本とは比較にならないほど密であった。したがって、常に中国語と接する機会も多く、多くの知識人は語音としての中国語を知っていた。このような関係から、「不」の字音も入声音が借用されたといえよう。

註

- (1) ハングルのローマ字表記は河野六郎先生の表記法（河野(1980)）による。日本語の舌内入声は ʈ で表記。
- (2) 対応の基準は『広韻』の反切による。
- (3) ただし『集韻』には敷勿切（勿韻）の反切がある（「灑也」）が、中国での類推音であろう。
- (4) 朝鮮漢字音の俗音については、李敦柱（1977）、同（1990；第4章）等参照。日本漢字音の慣用音については、高松（1982a）（第6章）、湯沢（1987）等参照。
- (5) 括弧内は小韻代表字。再建音は河野（1964～67）による。
- (6) 北京大学中国語言文学系語言学教研室編（1962）、袁家驊等著（1960）を参照。また長沙などの「不」 pu²⁴なども入声対応の声調である。またB.Karlgren（1923）における「不」の項も参照。
- (7) 最後の例は大島（1981）に指摘されているように模韻と尤韻の通用例である。
- (8) 「王二」は当該部分に誤脱があるようである。
- (9) 河野（1979）54頁（Sylvain Lévi の論文の引用）。また水谷（1971、237頁）に Skt.khubja-sobhita を「不闍蘇摩」と音訳したものがみられるが、これも非入声音を示すものであろう。
- (10) 李白「秋浦歌（吟）」；杜甫「夏日李公見訪」「晦日尋崔口耳戈李封」；白居易「効陶潜体詩十六首」「答卜者」「代人贈王員外」「想東遊

五十韻」「老熟」「夢微之」（白居易については松尾（1990）に言及がある）。なお 顧学頤校点（1979）『白居易集』によれば、「三年為刺史二首」において「不」が用いられ、上声（有）で押韻されているが、これは「否」の誤りであると見られる（たとえば『唐詩類苑』では「否」に作る）。「否」も句末に置かれて疑問を示す用法があり、句末助詞の「不」と機能は同じであるとされる（太田1988）が、声調が異なる。「不」は平、「否」は上声である。一般には、ともに「ヤイナヤ」と訓読する。

(11) 上田（1984）。同書逸文によれば、「無也」のあとに『孫愐切韻』の「不」の逸文（「與弗同也」）が続くが、反切（夫勿反）は同切韻からのものとはいえないようだ。

(12) 表記は水谷（1959）による。この文書では、t 入声音は r(i) で現れる。同書によればこの文書は8～9世紀の成立とするが、高田（1988;40頁）によれば、10世紀の成立とする。水谷（1959）に従えば、この表記は唐代における入声音の存在を示すことになる。

なお、『晋書音義』『慧琳一切経音義』には、「仿佛、髣髴」の「髣、佛」に対する音注として、「芳不反」（『晋書音義』中）、「霏不反」（『慧琳一切経音義』卷74）が見られる。この反切下字の「不」は入声音を表わすかもしれない。そうなれば、唐代における入声音表記の例となる。もっとも『広韻』によれば、「髣」の字音は入声音以外もあり（芳未切）、必ずしも、この反切下字の「不」が入声音を表わすとは限らない。

(13) 高田（1988）98頁以下参照。王力（（1958）218頁）は軽声音化しなかったことに関して pīuət > put > pu のごとき、合口一等への変化を考えている。また、下述のように「不」が軽唇音化していた可能性もなくはない。すなわち、ある時期は、非軽唇音と軽唇音とが併存していたのかもしれない。

(14) 丁聲樹（1935）、王力（1983）『漢語語法史』、呂叔湘（1982）第14章など参照。また橋本（1978）第3章参照。

(15) 丁聲樹（1935）の論文末尾の附記において、李方桂の次のような説を提示している。すなわち、古く「弗」には、現代の fu（弗）に

繋がる「重読」の他に、介母のない「軽読」があったとし、これが現代の pu (不) に連なるとし、いっぽう、中古の「不」は軽唇音化して現代の fou (否) になったとしている。

- (16) 河野 (1976)。なお日本の安然『悉曇藏』(880年)には、「不」の呉音(南方江南音)と漢音(北方長安音)の調音の仕方の違いが示されている。

- (17) 小倉肇 (1995) 参照。本文献は10、11世紀の恵信の自撰ではなく後人のものとされる。

なお、現代の伝承音でも「不也(ホッチャ)」「(否や)の意」「(法華經寿量品)」があるそうである(有賀(1989))。これらの例は疑問の助詞の用法であり、唐詩では平声が用いられていたことは上に見た。

- (18) その他、河野(1964~1967)の「資料音韻表」の「不」を参照。

- (19) 河野(1979)470頁以下参照。「不」ㅍ purなどはb層に入る(同503頁)

- (20) 「佛」はㅍ pur となる。なおㅍ pur の形は軽唇音化と関連するかもしれない。

- (21) ただし、辞書によれば、「不字」「不周風」の2語はㅍ pur である。この場合、ㅍ pur に続く c は濃音となる。また、「不実 ㅍㅅㅍ pusir」の場合は s の前でㅍ pu となるが、これは個別的な例とみなされる。

- (22) 中期語以前に生じたと思われる、この r 脱落の音韻変化については、李基文(1972)97頁以下など参照。複合語内部で-ㄹ -r とㄷ /ㅌ-t/c- が接したときは、一般にㄷ /ㅌ-t/c- が濃音化するが、このような緊密と見られる結合の際には脱落も見られる。

- (23) 頼(1955)によれば、カムスイ系言語、莫語における漢字借音のうち「旧音」は「不」・ㅍ³である(「新音」はなし)が、これは中古音の「不」の上声に対応するという。さらに「旧音」の借用は多く唐代までであるとする。時代的には日本字音と同類の借用と思われる。

参考文献: abc順(日本と朝鮮の字音(影印)資料は省略)

有賀要延(1989)『仏教語読み方辞典』国書刊行会

- 北京大学中国語言文学系語言学教研室編（1962）『漢語方音字匯』 文字
改革出版社
- 丁聲樹（1935）「釋否定詞‘弗’‘不’」『歷史語言研究所集刊外篇第一種』
下冊、國立中央研究院
- 董同龢（1944）『上古音韻表稿』（中央歷史語言研究所單刊甲種之二十一）
- 顧學頤校点（1979）『白居易集』（中国古典文学基本叢書） 中華書局
- 橋本萬太郎（1978）『言語類型地理論』 弘文堂
- 黄淬伯（1937）『慧林一切經音義反切攷』（國立中央研究院歷史語言研究
所專刊之六）
- 蔣一安編著（1968）『蔣本唐韻刊謬補闕』 台灣廣文書局
- 神尾弼春編（1976）『慧林一切經音義反切索引』 槿風莊
- Karlgren.B（1923）*Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japa-
nese*. Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris
- 河野六郎（1964～1967）「朝鮮漢字音の研究」『朝鮮學報』31～33、35、
41.（河野（1979）所収）
- （1976）「『日本呉音』について」『言語學論叢』15.（河野（1979）
所収）
- （1979）『河野六郎著作集2』 平凡社
- （1980）「ハングル」（国語学会編（1980）『國語學大辭典』
東京堂出版）
- 李基文（1972）『改訂 國語史概説』 民衆書館
- 李敦柱（1977）「『華東正音通釋韻考』의 俗音에 대하여」（『李崇寧先生
古希紀念 國語國文學論叢』塔出版社 所収）
- （1990）『訓蒙字會漢字音研究』 弘文閣
- 劉復等（1873）『十韻彙編』 台灣學生書局
- 呂叔湘（1982）『中國文法要略』 商務印書館
- 滿田新造（1964）『中國音韻史論考』 武藏野書院
- 松尾良樹（1990）「平安朝漢文學と唐代口語」『国文学 解釈と鑑賞』55—
10
- 水谷真成（1959）「Brāhmi文字転写『羅什訳金剛經』の漢字音」『名古
屋大学文学部十周年記念論集』（水谷真成（1994）所収）

- (1994)『中国語史研究』 三省堂
- 訳 (1971)『大唐西域記』 (中国古典文学大系22) 平凡社
- 南廣祐 (1973)『朝鮮 (李朝) 漢字音研究』 一潮閣
- 沼本克明 (1982)『平安鎌倉時代における日本漢字音に就ての研究』
武蔵野書院
- (1986)『日本漢字音の歴史』 東京堂出版
- (編) (1995)「呉音漢音分韻表」 (築島 (1995) 所収)
- 小倉 肇 (1995)『日本呉音の研究』 新典社
- 大島正二 (1981)『唐代字音の研究』 汲古書院
- 太田辰夫 (1988)『中国語史通考』 白帝社
- 潘重規 (1974)『瀛涯敦煌韻輯新編 瀛涯敦煌韻輯別録』 台湾 文史哲出版社
- 頼 惟勤 (1951)「漢音の声明とその声調」『言語研究』 17=18
- (1955)「『莫話記略』について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』 5 (頼 (1989) 所収)
- (1989)『中国音韻論集』 頼惟勤著作集 I 汲古書院
- 劉昌惇 (1964)『李朝語辭典』 延世大學校出版部
- 貞莉伊徳 (1961)「新撰字鏡の解剖[要旨]付表 (下)」『訓点語と訓点資料』 15
- 坂井健一 (1975)『魏晉南北朝字音研究』 汲古書院
- 高田時雄 (1988)『敦煌資料による中国語史の研究』 創文社
- 高松政雄 (1982a)『日本漢字音の研究』 風間書房
- (1982b)「『不づ』—慣用音成立の一の場合—」『国語国文』 51—11 (高松 (1993) 所収)
- (1993)『日本漢字音論考』 風間書房
- 築島 裕 (編) (1995)『日本漢字音史論輯』 汲古書院
- 上田 正 (1984)『切韻逸文の研究』 汲古書院
- 王 力 (1958)『漢語史稿』 (『王力文集』 9 (1988) 山東教育出版社 所収)
- (1983)『漢語語法史』 (『王力文集』 11 (1990) 山東教育出版社 所収)

王仁昫（1964）『唐寫本刊謬補缺切韻』 台湾廣文書局
 袁家驊等著（1960）『漢語方言概要』 文字改革出版社
 湯沢質幸（1987）「漢字の慣用音」（『漢字講座 3』） 明治書院